

2023（令和5）年度 自己評価・学校関係者評価書

学校法人スピノラ学園双百合幼稚園

1 教育目標

目標～神さまに愛されていることに気づき、神さまと共に歩む子ども
 ☆自分で考え 行動できる子ども
 ☆元気に活動する たくましい子ども
 ☆心情豊かな子ども

2 本年度の重点課題

- 1 教職員の連携を密にしながら、互いに切磋琢磨し、資質向上を目指す。
- 2 環境を生かした保育内容の充実を図り、「双百合」のよさを更に高める。
- 3 「全体的な計画」の「重点的に取り組む教育の柱」参照

3 評価項目の達成及び取り組み状況（教員 15）

◆a；十分達成されている、b；達成されている、c；取り組まれているが成果が十分でない、
 d；取り組みが不十分 ※%は小数点第1位を四捨五入の為100%超の場合有

◆評定A；自己評価A・Bが80%以上、B；A・Bが60%以上、C；A・Bが60%未満

	評価項目	評価内容	評価	集計	%	評定
1	キリスト 教保育	・朝礼・食事・降園時の祈りや、月2回の「宗教の時間」を通し、神さまの愛に触れながら「双百合の4つの心」について考えることができたか。 ・毎月の聖歌や宗教行事を通して、神さまの愛について深めるよう努めたか。	a	2	13	A
			b	11	73	
			c	2	13	
			d	0	0	
2	教育課程 の編成・ 実施に関 して	・年間指導計画や月カリキュラムを作成し、学年毎に毎月の評価・改善を図ったか。 ・園地の環境を活かした教育活動を進めるとともに、食育の推進やICT教育の理解に努めたか。	a	0	0	B
			b	9	60	
			c	5	33	
			d	1	7	
3	保育の計 画性	・発達段階に合わせた教材選びやテーマを定めた系統性のある保育等、内容の工夫に努めたか。 ・子どもの育ちや変容を、学年や他の教職員と共通理解することができたか。	a	5	33	A
			b	8	53	
			c	1	7	
			d	1	7	
4	保育のあ り方 幼児への 対応	・一人一人の傾向や特徴を把握し、特に配慮や援助が必要な子どもについては、教職員で情報を共有することができたか。 ・子どもへの対応も、学年や多くの教職員で共通理解しながら進めるよう努めたか。	a	7	47	A
			b	7	47	
			c	1	7	
			d	0	0	
5	安全への 配慮	・安全教育年間計画や危機管理マニュアルに基づき、日常の保育に生かすことができたか。 ・毎月の訓練や点検で、安全への意識を高めるよう努めたか。	a	4	27	B
			b	6	40	
			c	5	33	
			d	0	0	
6	健康管理	・保健計画に基づき、手洗い・うがいの習慣化な	a	6	40	

		ど基本的な生活習慣を養うよう努めたか。 ・食物アレルギー等の健康管理を保護者や給食業者等と連絡を取りながら進めたか。	b	6	40	A
			c	2	13	
			d	1	7	
7	研修と研究	・時程や行事等の見直しにより、研究時間の確保に努めたか。 ・外部研修や他園の公開保育等に積極的に参加することができたか。	a	0	0	C
			b	2	13	
			c	11	73	
			d	2	13	
8	教師の専門性と資質の向上	・園内研修会を計画的に行い、外部研修の成果報告等により情報交換ができたか。 ・専門家による教育相談や子ども支援の研修により、児童理解を深めることができたか。	a	1	7	C
			b	5	33	
			c	8	53	
			d	1	7	
9	保護者や地域への対応	・保護者には丁寧、誠実に対応し、日常の電話や個人懇談等で相互理解に努めたか。 ・岸和田市、和泉市等の各種機関（市担当・小学校・各種施設等）と連絡を取りながら、子どもの支援に生かすことができたか。	a	6	40	A
			b	7	47	
			c	2	13	
			d	0	0	

4 総合的な評価結果(重点課題を含め)

◇神さまに愛されていることを知り、神さまと共に歩む光の子の育成

毎日のお祈りや「心のお花」の取り組みを通して、双百合の「4つの心」を子どもたちの中に育む意識は高まった。御聖堂がなくなった代わりにマリア像やルルドを祈りのスポットとして活用し、できることから取り組んでいる。更に宗教研修によって、子どもたちへの関わり方についても見つめ直すことができた。

◇チームワークと資質向上に努める教職員

オンライン中心の研修となり、他園との情報交換ができなかった。そのため、研修の共有を活発にできなかったのが反省である。しかし園内研修では、意見交換や情報共有をすることができ、新人職員への指導や子どもたちの対応についても協力体制がとれている。このような現状から、チームワークは発揮できていると言える。

◇一人一人に寄り添い、丁寧な関わりで子ども主体の保育を目指す。

子ども主体の保育とは何かを見つめ直すことができた年だった。活動や行事を見直し、ねらいは継続させたまま子どもの活動をより深めるための一歩を進むことができた。また、子ども一人一人の特性を職員で共有し、対応を相談し合って、教材や環境を工夫すると同時に、子どもに寄り添う保育の工夫を考える時間を多く持つことができた。

◇その他

アレルギー園児の対応やバスの安全（全バス安全装置を装着し、子どもへの訓練も実施済）については、何重ものチェックの仕組みを作ることによって改善されていった。更に、コロナやインフルエンザの脅威は完全にはなくなっていないため、手洗い・うがいの健康管理には気を付けて取り組むことができた。

5 今後の課題

○キリスト教保育の更なる充実…身近に神さまの愛を感じる取り組みをし、1・2歳児から聖歌を取り入れるなどキリスト教保育の充実を目指す。そのために今後も宗教研修によって職員自身の中に神さまを感じることができるように、イエスさまの教えに対する学びも深めていく。

○特色ある教育…園地の魅力である裏山や広い園庭を最大限に活用するアイデアを考え、道具や遊び場の環境構成を具体的に整え、「遊びこむ環境作り」を行動に移していく。また、ICT教育について、遊びの中でICTを活用する力を養うために何ができるかを考える。

○保護者・地域との連携…まだ、地域の教育資源との連携にはコロナ禍の後遺症が残っており、開かれたこども園としての活動には完全には至っていない。しかし保護者との連携はアプリやSNS、対面での関わり、懇談や参観を通して行っているため、更に保育にも巻き込んで協力体制を作ることで、「共に育つ」を実践していく。

○研修の充実…他園の公開保育などに積極的に参加するなどして保育の潮流を見極め、保育方法の視野を広めると共に職員同士でその学びを共有することを意識して行う必要がある。

○一人一人を大切にしたい保育…当園の強みである「丁寧な保育」「一人一人に寄り添った保育」を今後も継続的に維持していくために、職員教育をこまめに行い非常勤職員も含めて学び合う。

○教職員の連携…職員数の拡大により情報共有が重要になっている。そのためのしくみを工夫してきたことの成果は現れているが、更に個別支援や働き方の観点からも連携を強めていく。

6 学校関係者評価

◆キリスト教保育について

○シスターが以前から話していた「一人一人を大切にする」「ナンバー1でなくオンリー1」というキリスト教保育で大切な教育の柱がしっかり引き継がれていると思う。

○キリスト教を基盤とした教育方針は多様性の時代に合っている。

○双百合の子どもたちは、やりとりや言葉遣いが全体的に穏やかで優しい。それは日頃からのキリスト教を基盤とした指導の成果であると考えられる。

○いつも課題になっていた宗教について、職員の宗教研修に積極的に取り組むことで神さまの愛について深め、日々の保育の中で神さまについて触れ、子どもたちに伝えており評価できる。

○職員自身の心のためにも貴重な時間なので宗教研修は続けて欲しい。

◆保育の計画性

○自然の中で子どもの心を開放し、遊びの中で発見や関心をもつ時間をつくることを奨励する。

○裏山畑を活用して作物の世話をしながら、保育者と子どもと一緒に喜び合える取り組みができたから素晴らしい。年間を通して更に活用してほしい。

○子どもにできないことを強制するより、その子の好きなことやできることを沢山見つけ、一人一人を大切にしながら子どもの心に寄り添った取り組みをするという考え方に賛同する。好きなことを繰り返している中で、苦手なこともいつの間にかできるようになることもある。

○子ども主体の保育を意識しているため今後の保育に期待したい。

○一人一人の子どもを大切に、教職員で情報を共有して関わりや保育を工夫しているところは評価できる。

○日々の教育に加えて専門講師（神さまのお話、体育指導、英語指導など）による指導が受けられることに魅力を感じている。

◆安全への配慮

○保育室のピアノが一部アップライトのため子どもに背を向けて振り向きながらの演奏となる。視界から外れる子どもが出るのではないかと懸念されている。

○職員数や園児数の多さは、安全への配慮が欠けやすくなるため、報告・連絡・相談を徹底して欲しい。

◆健康管理

○コロナ禍以降、次第に日常が戻ってきたが、どこまで戻して良いかの判断は難しく、手探りの1年間であったと思う。多くの人、子どもたちが集まる学校・園として、以前に戻すことに慎重になりつつ、子どもたちがのびのびと過ごせる環境を作り上げていこうとする工夫が感じられる。

◆研修と研究・教師の専門性と資質の向上

○今年も「C」評価であったこの項目について、環境や時間の問題も要因としてあるかもしれないが、職員が自己に厳しく評価している面もあるのではと推測する。問題意識を持って取り組めば成長に繋がると思う。

○より一層の保育の充実を目指して人材育成や研修に時間を割いて欲しい。

◆保護者や地域への対応

○運動会やクリスマス会などの行事では、観覧の保護者の入れ替えをするなど、気配りが感じられる対応が多くあって良かった。しかしその一方で保護者の待ち時間の短縮や対策など、まだ検討の余地がある行事もある。

◆その他

○お便りで園の行事や様子をお知らせするだけでなく、今の時代に応じ、SNSなどを通し子どもの様子や保育内容を発信していることは、保護者だけでなく、双百合幼稚園に興味がある方にも知っていただくことができるので良い。

○教職員の連携を密にして振り返りを大切にしながら、質の高い保育を目指してほしい。

○少子化が進んでいるが、双百合幼稚園はずっと在り続けて欲しい。

以上

2023年度 自己評価集計結果解析

1 キリスト教保育

昨年のC評価から大きく前進している。職員宗教研修での分かち合いや、宗教行事での取り組みなどを通して、子どもたちの心の成長に手応えを感じていると言える。

2 教育課程の編成・実施に関して

カリキュラムのPDCAと園地(裏山や畑)の活用にまだ努力の余地があると言える。ICT教育に関して、今年度は職員研修の段階であり、具体的な取り組みは始動しておらず環境整備中である。

3 保育の計画性

保育の工夫や、他職員との情報共有に関する達成度は、経験年数によって評価が分かれるところであると推測される。しかし、チームワークを発揮しながらの保育の成果が表われている。

4 保育のあり方 幼児への対応

昨年同様、AとBで94%と高評価である。子どもへの丁寧な対応には自信をもっており、それが園風として受け継がれていると考えられる。

5 安全への配慮

バスの安全装置も装備され、安全に対する行動は習慣化されているが、訓練や点検に対して、油断や情性的な意識にならないようにするのが課題である。

6 健康管理

アレルギー対応については連携がスムーズになってきている。また、コロナ禍での健康習慣が今でも活きている。食育などにも力を入れ始めているので、更に拡大していくことが必要である。

7 研修と研究

昨年と同様、オンラインによる研修中心となり他園の情報が得られなかったことや、研修のアウトプットと共有が不十分であったとの反省がある。

8 教師の専門性と資質の向上

キンダーカウンセラーの先生による指導や園内研修は有意義であったものの、質の高い保育を実現するためには更なる自己研鑽が必要である。自ら具体的な保育内容を計画する資質を向上させるために、自主的な研究や職員同士の情報交換などによる切磋琢磨を行っていくことが求められる。

9 保護者や地域への対応

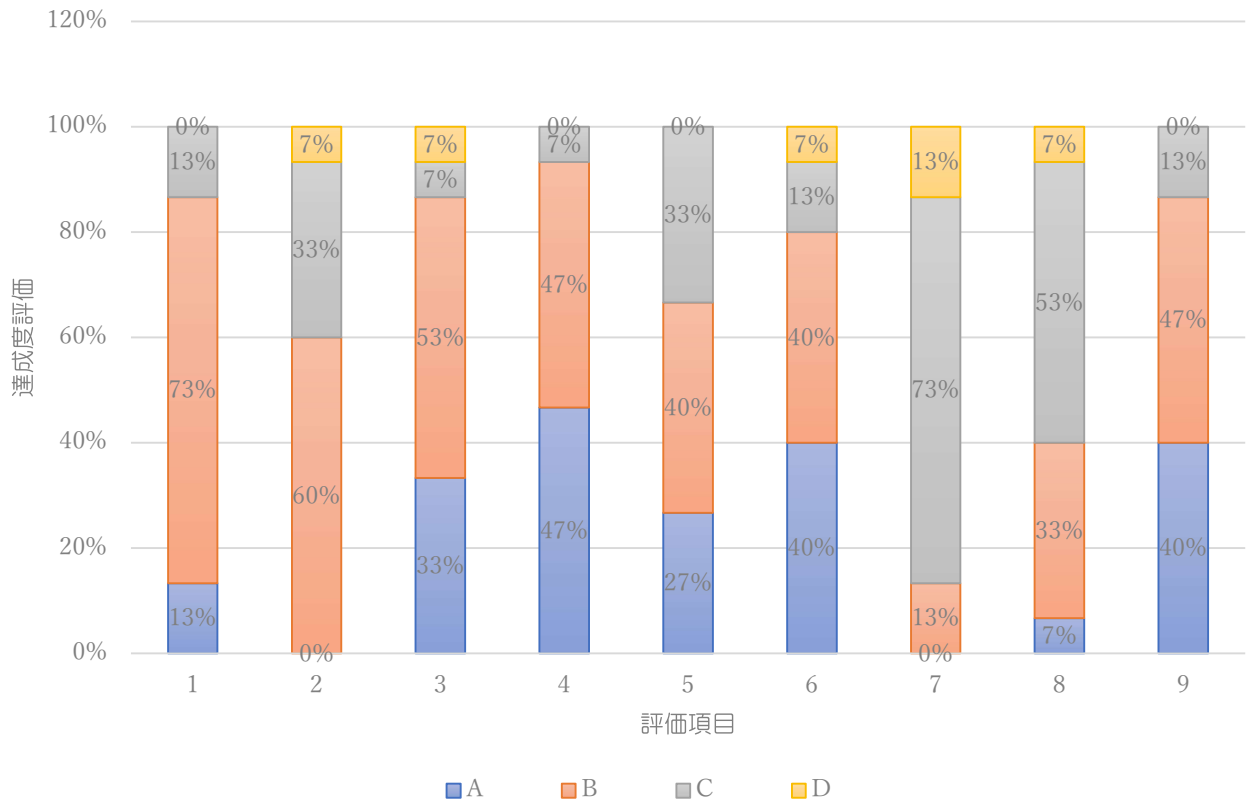
保護者とのコミュニケーションは様々な形でとるように心掛けていた成果が見られる。各種機関との連携は園として密に行っている。

(まとめ)

今年度は「7 研修と研究」及び「8 教師の専門性と資質の向上」に課題が残った。自分の課題に合った研修を見つけることや、研修した内容を全体で分かち合う時間が少なかった。新卒者、新任者が4名いることも自己評価に影響があったと思われる。自分の保育の達成度を昨年度と比較することができず、評価が難しかったと考えられる。また、経験年数の長い保育者にとっては、個人的な達成感が高いものの、チームとしての動きを客観的に見ると評価が低くなる項目もあると思われる。

来年度はチーム全体の資質の底上げをねらい、個々人の達成感も高められるようにする必要がある。また、その他の概ね評価の高い項目についても、更に具体的な目標を立て、それに向かってチーム一丸となって取り組むことで、保育の質、こども園としての質を高めていく。

自己評価集計結果



	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	13%	0%	33%	47%	27%	40%	0%	7%	40%
B	73%	60%	53%	47%	40%	40%	13%	33%	47%
C	13%	33%	7%	7%	33%	13%	73%	53%	13%
D	0%	7%	7%	0%	0%	7%	13%	7%	0%